



Book Review

評者: 林 千冬 神戸市看護大学看護学部

看護師が「書く」こと

著: 宮子あずさ / 本体: 1800円+税

発行: 医学書院 / TEL: 03-3817-5650



看護師が臨床を書けば、世の中はよくなる

「書くことが苦手です」という人は多い。看護師にとって「書く」といえば、まず、事例や研修のレポートなどが想起されるだろうか。確かにあまり「得意」とはいえそうにない書き物だ。けれども、IT化が進む昨今、SNSしかりブログ類しかり、書いて発信する機会——「著述」の機会は恐ろしいほど拡大している。

著者は、こんな時代が来る前からの、元祖「看護の書き手」ともいうべき人である。ピカピカの新人時代からベテラン訪問看護師に至る現在まで、一貫して自分の経験を対象化し、観て、考えて、表現し続けている稀有な書き手である。しかも、その著述の種類は、コラムやエッセイから研究論文まで実に幅広い。

そんな著者の手による本書は、シンプルなタイトルながら内容は盛りだくさんである。第1章では「書くこと抜きに看護はできない」という著者の、著述そのものへの思いと覚悟が語られる。続く第2章は「看護を書く言葉」の選び方、磨き方が述べられつつ、結果的には筆者の「看護論」として読むことができる。

第3章「著述の段取りと小技・大技」では見出しどおり、書き始めから前に進める段取り、そして推敲・練り直しといったプロセスについての、著者の技が惜しげもなく披露される。出色は「無駄に感じの悪い批判をしないための書き方」「主題に応じた著述、オチと言いつ」「書きながら自分のバイアスを知る」とい

う3つの節だ。どんな著述においても大事なことに、誰も表立っては触れない・触れたがらないこの秘技(?)を、真正面から論じている点は痛快だ。

ところで、現在、著者の名を世に広く知らしめているのは、東京新聞に連載中の「本音のコラム」である。毎日の連載の週1回分を、作家やジャーナリスト、研究者等と並び立ち、すでに担当は10年だという。多様な社会問題を看護師の視点でとらえる内容はもとより、末尾の「看護師」という肩書がちよっと誇らしい気持ちにしてくれる。第4章では、新聞連載執筆をめぐる舞台裏が語られるが、中身はいたってまっとう。看護師ならではのコラムとは、「現場の感覚を伝えること」に尽きるのだという。

なお、「書くこと」といえば「看護研究」が思い浮かび暗い気持ちになる向きには、第4章4節「著述としての学術論文の可能性」がイチオシだ。「せっかく看護研究をやるなら、学術論文を読む機会にしてほしい」。大いに賛成。

書くこと・著述とは、表現し、伝えること。つまりところ本書は、看護師への「著述のススメ」である。看護師が表現することで、社会に「日常に発見がある」ことが伝わり、「寛容であらうよ」というメッセージが伝わるのだという。看護師が「臨床を書けば世の中よくなる……かも!」といいつつ、きっとかなり期待していますよね、宮子さん。私もです。